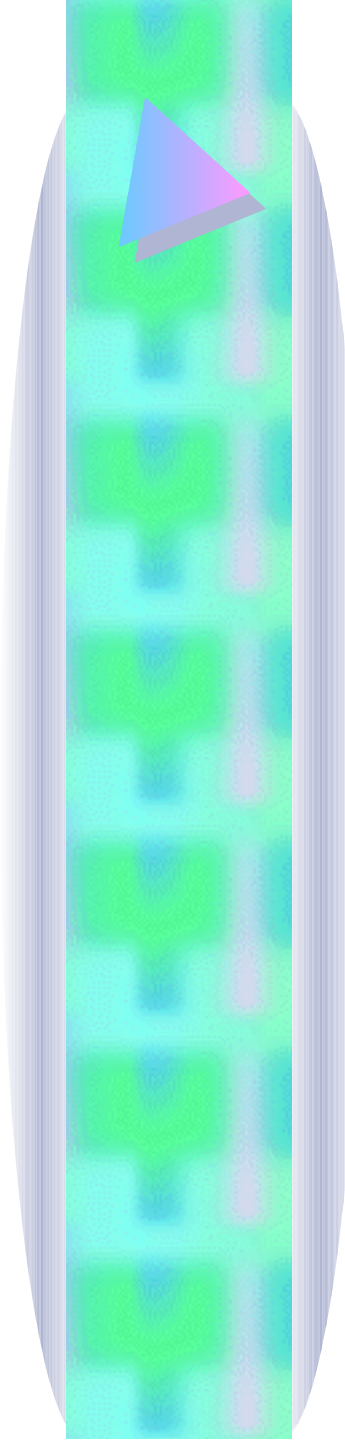




医師教育における**SP**の役割



SPとは

- Simulated Patients

- 大規模

- ・ 通常の講義で模擬患者が数名つく。
選ばれた学生数人が他の学生の前で行う

- グループ

- ・ グループ一つにつき**SP**が一人つく。
学生一人のみもしくは全員が行う。

- Standardized Patients

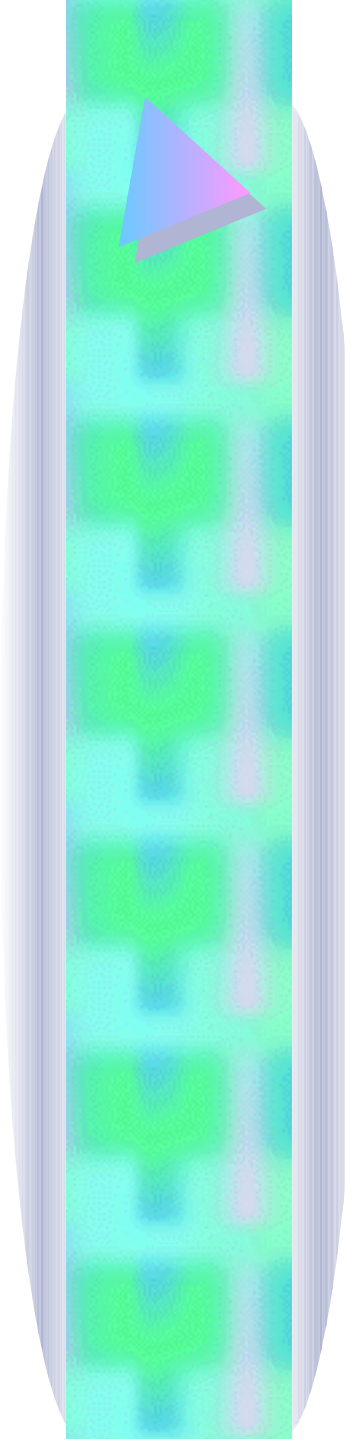
- コミュニケーションスキルの評価

- ・ **OSCE**での医療面接の評価にあたる

- 身体的診察の技能評価

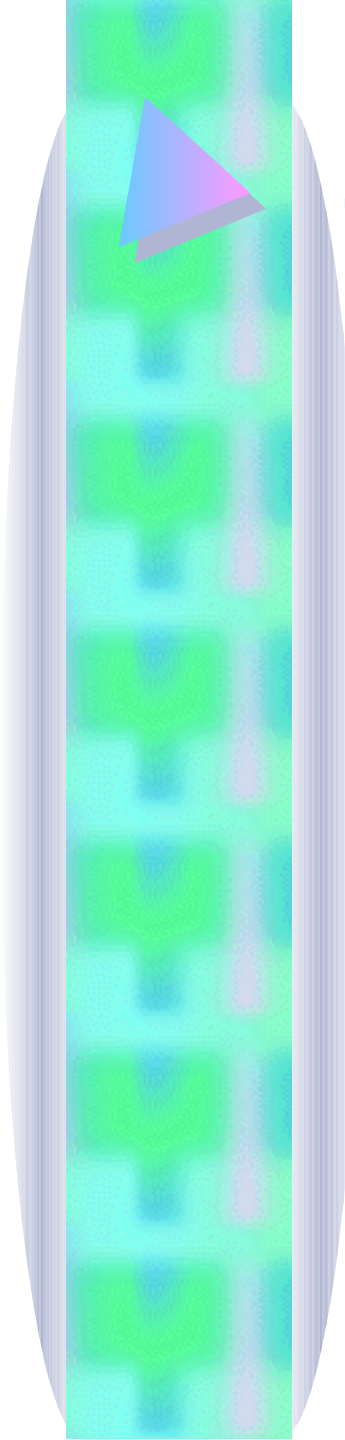
- ・ **OSCE**での身体的診察技能の評価にあたる

- 教育効果の研究



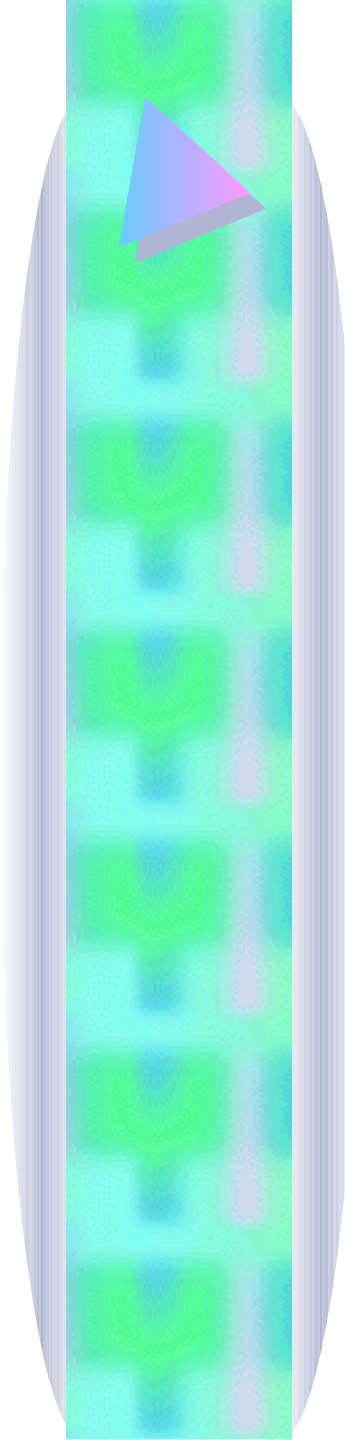
SPへの鍵

- ・ コミュニケーションギャップの克服
 - 同種専門職間
 - ・ 職場内のストレスは環境を悪化させる
 - 異種専門職間
 - ・ チーム医療において最高のサービスを提供
- ・ パラダイムと人間的上下の結びつきとの関係
(指示する・教える・職位・先輩・年長・医師といった上下)
 - 役割をはっきりさせる。
 - 役割を果す。
 - 役割の上下は人間関係の上下ではない。



SPの問題

- ・ 人的確保
 - 実習・試験時のみにまとまった人数を確保するのは難しい。
 - OSCEでは一部学生を使うこともある。
 - SP、SPを指導する人材の両方が未だに不足している。
 - 未熟なSPの利用は逆効果となる。
- ・ 時間的制約
 - SPそれぞれの時間を実習時間にすべて合わせることは困難。
- ・ 金銭的資源
 - SPへの謝礼。



実践で重要なこと

- **Feedback**

- 学生、模擬患者双方、良かった点、改善すべき点を短く適切に指摘する。この際学生の心理的影響への配慮が欠かせない。

- **Facilitation**

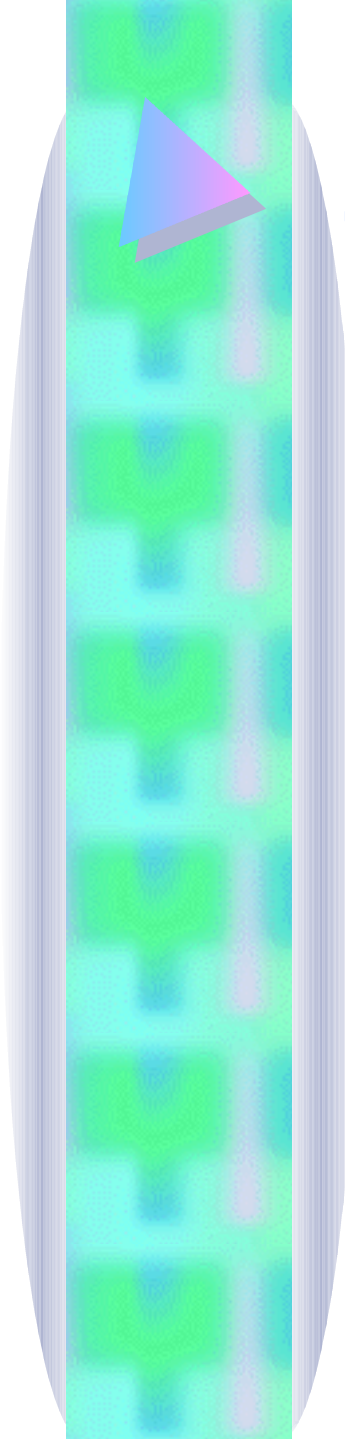
- よい悪いの評価はせず、学習者の学びを促進する。つまり、学習者自身に良かった点、改善点を考えてもらう。

- **Follow**

- 雑談、声掛けを通して、落ち込んでいる学生は励まし、調子が出ている学生は更に改善点を考えさせる。

- **Finalize**

- 反省・次回への課題のあぶりだし。



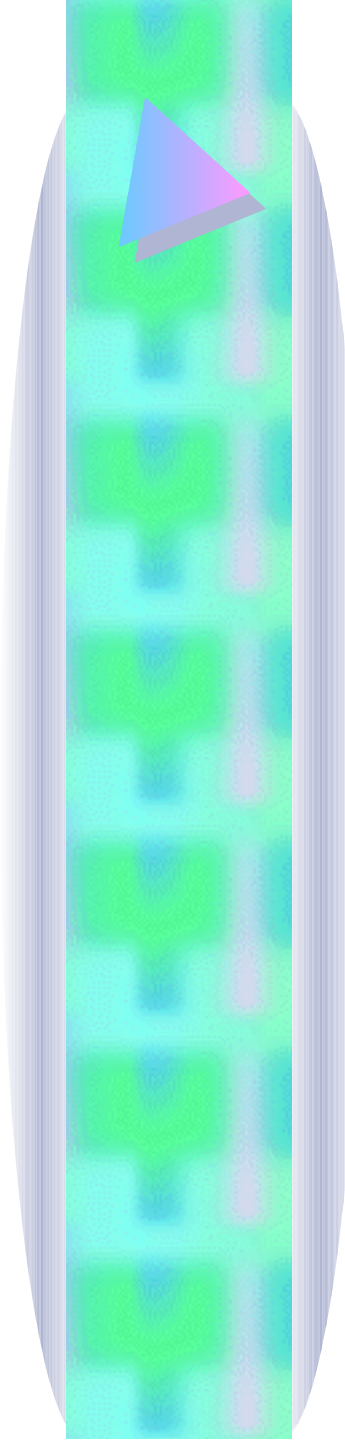
SPから得るべきものとは

- ・ コミュニケーションスキル
 - 授業では**Style**を教科書で学び、その実践を**SP**で行う。
 - スキルの向上の度合として、シナリオの内容をどれだけききだせるかが問題となる。
- ・ 技能
 - **OSCE**の身体的診察技能にあたり、**SP**は基本的に診られるのみ。
 - 実習で日常的に行なわれている学生同士の練習がこれにあたると考えられる。
 - 患者に対する思いやりも含む（聴診器をあためる、何を行うかを説明するといったもの）。



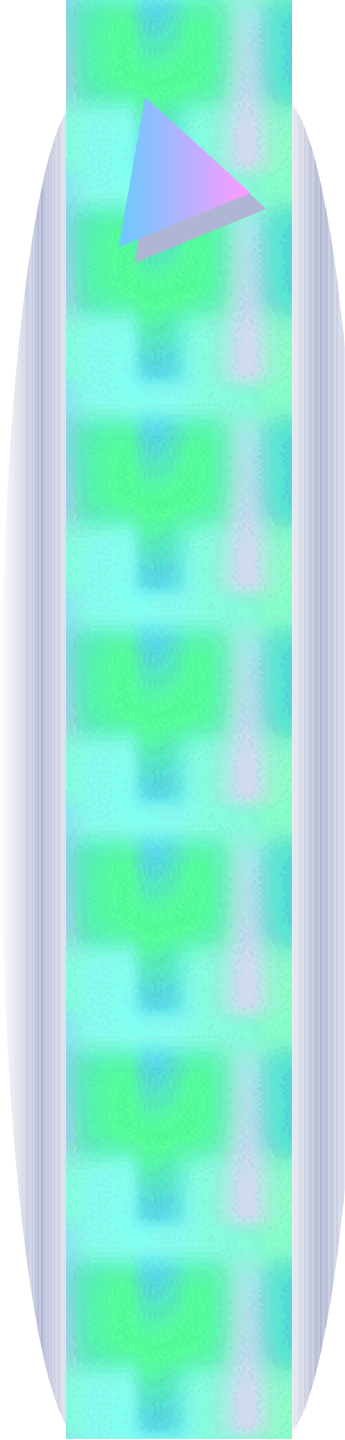
疑問

- ・ 人・時間・金をかけたただけ本当に技能がアップするのか。
 - **Well trained**でない**SP**との実習は逆効果になる。**SP**そのものの評価がされることは少ないので、適切な**SP**との実習かどうか判断しづらい。
- ・ 年に一回程度の実習で何が得られるか。
 - コミュニケーションは多くの人とのやりとりを通じて学ぶものではないか。
- ・ 一回の面接を何回も見直して復習することになる。
 - 限られた模擬患者相手とのやりとりから学べることは自ずと限られる。



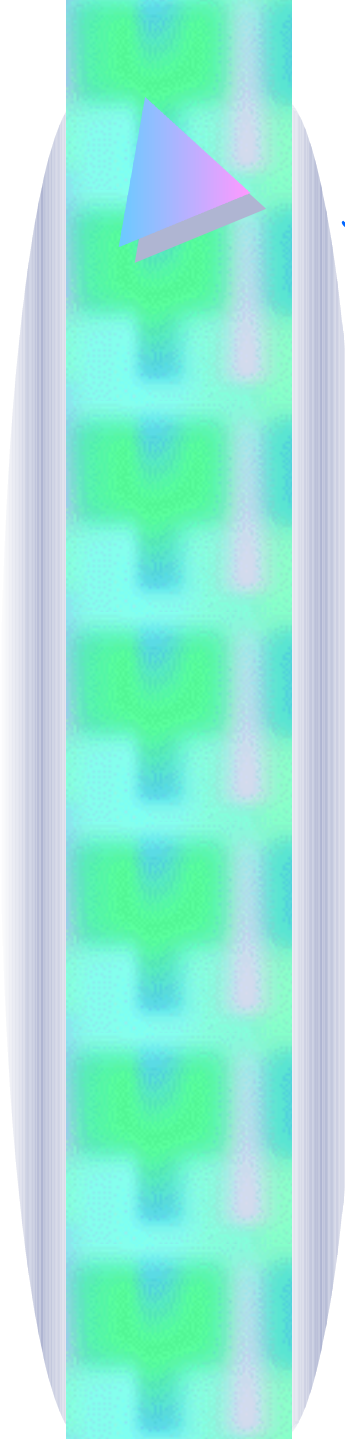
コミュニケーション能力を高める には

- ・ 社会的活動に参加する事が必要
 - 老人保健施設における介護実習、障害者養護施設における実習
- ・ 社会的経験を増やす
 - ボランティア
- ・ フィールドワーク
 - 厚生労働省、製薬会社、医療機器メーカー等、医療にかかわる様々な人々に接し、仕事について理解を深める
 - 医療訴訟の傍聴などを通して、医療者と別の面から医療を理解する



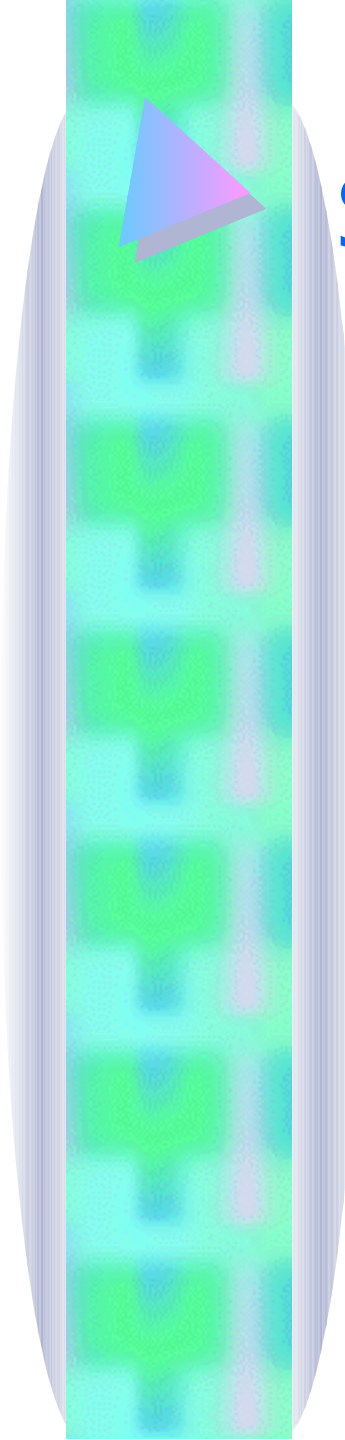
コミュニケーションの成立

- ・ 初診時から**100%**コミュニケーションを成立させることは可能か
 - 初診時一回で問題を理解することができればよいが、これは単なる理想に過ぎない。
- ・ 患者に協力しようという気にさせる対応の仕方
 - コミュニケーションは双方向のもの
- ・ 初診時の問診票を利用して意思疎通を円滑に行う
 - 問診は時間がかかる上に、すべてをまとめるのは難しいので、待ち時間に書いてもらうことで状態を自分自身把握することができる。問診票の記入ができない状態では、問診も困難であるので、完全な解決方法ではない。



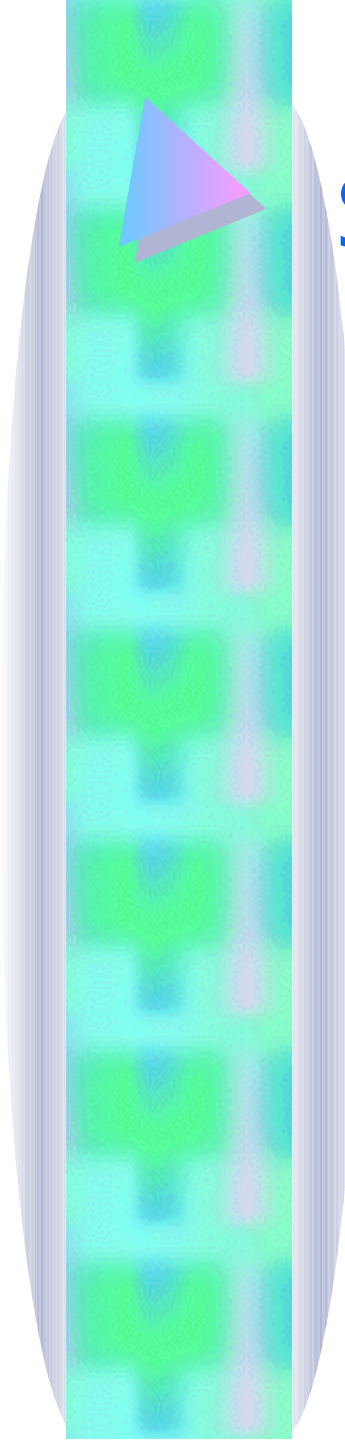
再度SPの役割とは

- ・ 技能評価時の**Standardized Patient**として
 - 技能の評価方法についてはまだ研究途中
 - 人的確保、時間的制約の問題こそあれ、現状ではそれほど問題になっていない
- ・ コミュニケーションスキルの向上として
 - 現在の状況ではかなり不十分
 - 少なくともコミュニケーションの練習はそれなりの頻度で行うことが望ましい
- ・ コミュニケーションをとりづらい患者への接し方の練習
 - **SP**が当初持っていた関心と教育の場での役割との折り合いをうまくつける



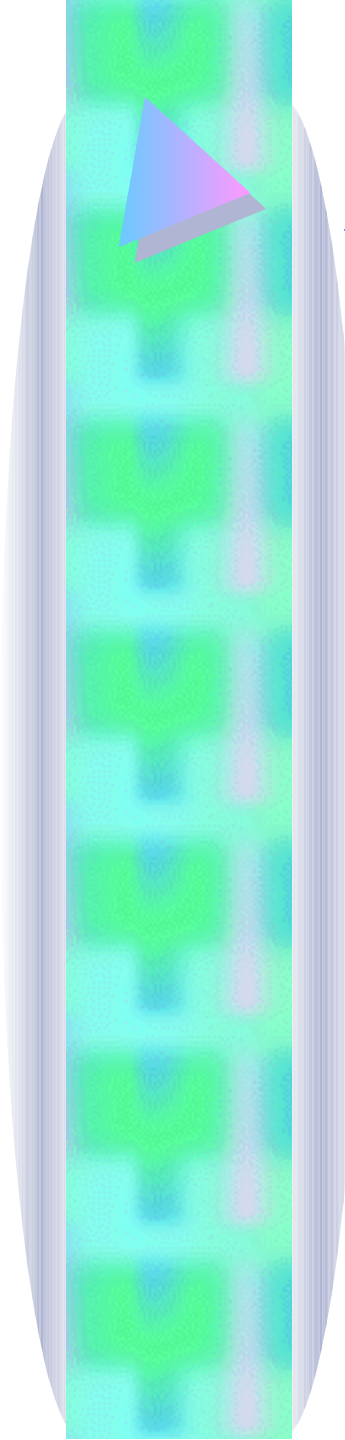
SPでは学べないこと

- ・ 医療現場での様々な実習
 - 臨床実習
- ・ 幅広いボランティア活動の機会を増やすための場所と時間の設定
 - 老人保健施設における介護実習、障害者養護施設における実習
- ・ フィールドワーク
 - 厚生労働省、製薬会社、医療機器メーカー等、医療にかかわる様々な人々に接し、仕事について理解を深める
 - 医療訴訟の傍聴などを通して、医療者と別の面から医療を理解する



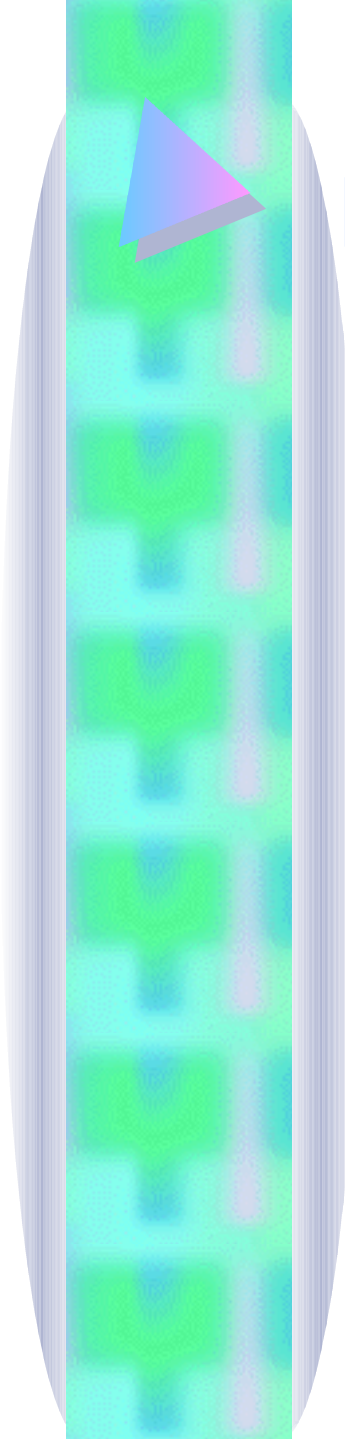
SPの代替として

- ・ コンピュータを利用した**Virtual Reality Patients**
 - 音声認識、構文認識の不完全さを逆に患者とのコミュニケーションの難しさとしてとらえることもできるとの研究もある
 - 学生が慣れていない場合がある
 - コミュニケーション以外で、例えば麻酔練習用人形などは利用されていることもある。
 - コミュニケーションもある程度人工知能の研究は進んでいる
- ・ **Web Based Learning**
 - 問診のうち一部の分野では**SP**とそれほど効果は変わらないとの研究もある



参考文献

- ・ 医療コミュニケーション実践マニュアル
 - 大西弘高 黒岩かおる ぜんにち出版
- ・ 話せる医療者
 - 佐伯晴子 日下隼人 医学書院
- ・ Web-based learning versus standardized patients for teaching clinical diagnosis: a randomized, controlled, crossover trial (Teach Learn Med. 2006 Summer;18(3):208-14)
- ・ The use of virtual patients to teach medical students history taking and communication skills (The American Journal of Surgery 191 (2006) 806-811)
- ・ その他



Emacsのdoctor.el

- Lispで実装された精神科医のシミュレーション
 - I am the psychotherapist. Please, describe your problems. Each time you are finished talking, type RET twice.
 - Why do you say that?
 - Is it because do I say that that you came to me?
 - Does it bother you that do you say that that I came to you?
 - When did you first know that do I say that that you came to me?